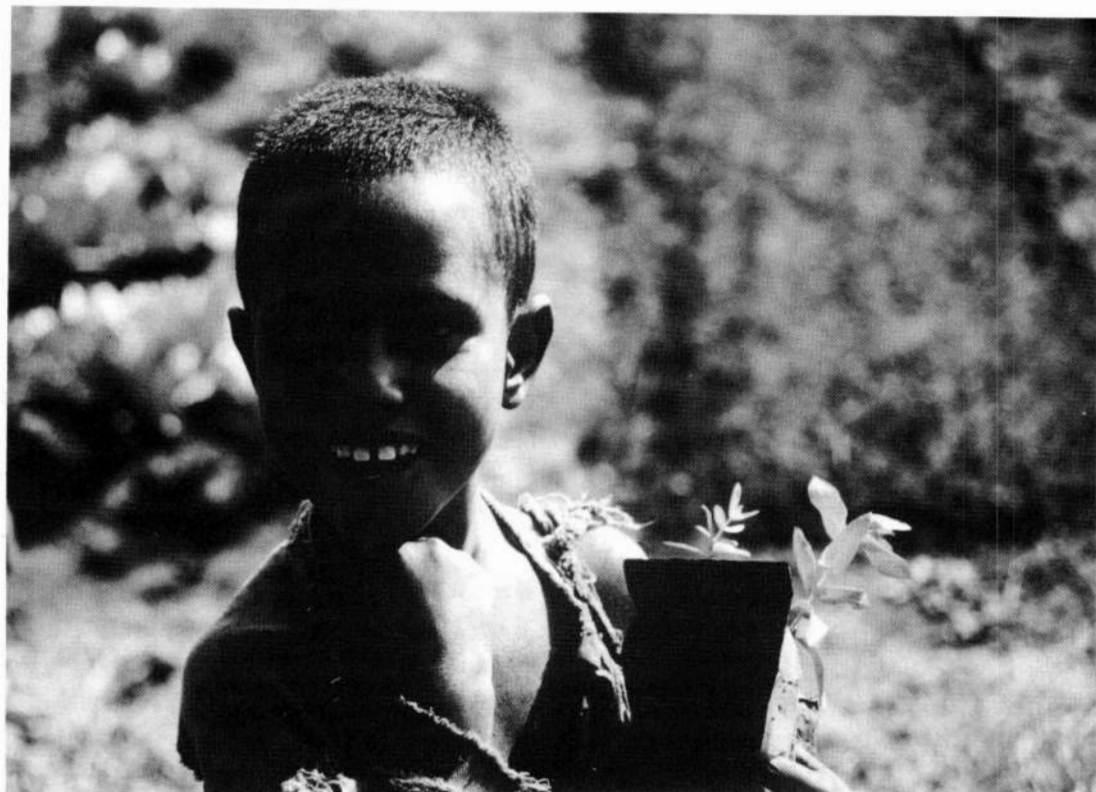


Trial & Error トライアル・アンド・エラー No.74

試 行 錯 誤



特集 エチオピア雨不足'87

エチオピア雨不足'87	2
コレブへの道.....	4
私たちの見たエチオピア	
マザースクールの笑い声.....	6
エチオピアの女たちは大変、スタッフも大変	7
ホームスティの村で	8
エチオピアのプロジェクトがわかるために.....	9
エチオピアのスタッフを知っていますか.....	10
マーシャ村通信.....	12
JVCスタディ・ツアー タイの現実にふれる旅	14
井戸修理ワークキャンプに参加して.....	16
投稿 SHARE にとっての当面の課題	18

エチオピア雨不足 '87

エチオピア事業担当 林 達 雄

干ばつの再来か？

84年、エチオピア北部を襲った大干ばつからの復興と、再来が予想される干ばつの被害を未然に防ぐことを目的に、マーシャ村で始めたプロジェクトがようやく軌道に乗り始めた今年の夏、現地から「例年には6月下旬に始まるはずの大雨期の雨が大幅に遅れている」という情報が入った。まずは現地で農業・植林を担当している農業技術者・伊藤達男氏からの報告を抜粋してみたい。

5月下旬から雨らしい雨は降っていない。7月の初め頃から農民は雨乞いを始めた。アジスアベバでは、7月3日から雨が降りだしたらしいが、ここウォロ州では今日（7月29日）になっても、雨はまだ来ない。もうすでに1カ月は大雨期の開始が遅れている。7月5日頃まで降らなければ干ばつの予兆、7月28日頃まで降らなければ干ばつは決定的だと、エチオピア人は言っている。どうして雨が降らないのかと聞けば、「アッラーの怒り」と信じている。前回の干ばつのこともすっかり忘れ、結婚式が重なり酒を飲み、ケンカをやっている。またコプト教会の老人に聞くと、お祈りを怠ったためらしい。

小雨期作（主に大麦）の結果は良かったが、農民の中にはあと1～2カ月分の貯蔵食糧しか残っていない者もあるようだ。ウォロ州の場合、自給できるとすれば小雨期作から全体の25%、残りの75%は大雨期作に依存すると考えられている。JVC・農業省の植林予定が大幅に遅れているだけでなく、乾燥やアブラムシの害で、畑作物の育成が悪く、農地を耕起したものの、播種できない畑も多い。その他、湧き水が涸れたり、一部の地域では7月23・24日にイナゴが出現したという情報もある。また、川の水量が減ったり、徐々に「雨降らず」の影響が出はじめている。穀類のマーシャ市場価格も徐々に上昇傾向にあり、反対に家畜の値段は下降気味である。これは干ばつに備えて穀物を蓄えねばならず、一方家畜の飼料（主に草）が枯れば売らねばならず、また将来の家畜価格の急激な低下を見越して、早めに手

離すためだろうと考えられる。

今から雨が降って回復する畑もあるだろうが、私の見た限りでは平年の収穫を大きく下回るのではないと思われる。

前回の干ばつ（1982～1984年）の時は、有効な降雨ではなかったが、多少の雨は降ったそうだが。とし、6～7月の降雨は皆無に近い。このような状態にもかかわらずエチオピア政府による具体的な対策はまだないらしい。情報不足を理由にしているが、これは「やる気」がないことの裏返しで、「怠惰」を自ら証明しているようなものだ。

山々も畑も放牧地も、すべて再び緑を失い色褪せてきた。各村には最低数カ所、涸れない湧き水があるそうだが、問題は食べる物である。農業教室の受講者たちに聞くと、全員食糧は2カ月以上もたないと答えた。水路もいくつか修復する予定だが、絶対的に水量が少ないので、有効な方法にはなりえないであろう。

食糧と共に気にかかる事は、飢饉が深刻化すれば、次の小雨期作用の種子をも食べてしまうのではないかという事である。外部から移入した種子（主に大麦・小麦）は、必ずしもマーシャ地区には適さない。そこで、農民が種子を貯蔵するためにも、当座の食糧供給が緊急課題となる。

<追伸>

7月30日明け方、待望の雨が降り始めた。この日、24mmの降雨量を記録した。この後も続けばいいのだが。

JVCの対応

(1) コレブ地区調査

7月28日～30日、マーシャ村からさらに西に60km奥地に入ったコレブ地区の食糧備蓄・水に関する調査を行った。JVCでは1985年2月から1年間、県の中心地アジバールで緊急医療救済活動を行って来たが、この時期に県内で最も被害を受けた地域がいわゆる低地、特にアジバール給食センターまで歩いて3日間かかるコレブ地区だと言われていた。エ

女たちが頭に巻いた黒い布は喪の印（マーシャ村で）



チオピア北部の地形は、標高 3000m 近い平坦な台地（高地）と浸食によってけずりとられた大峡谷の谷底（低地）とに分けられるが、低地は水の利が悪いために干ばつの被害を受けやすく、交通の便が悪いため食糧配給、医療など援助の手も届きにくい。

この地域の農家の人々に「この大雨期作の収穫の見込は？」と聞くと、今日にでも雨が降り始めない限り、すでに植え付けた分も芽が出ないと言う。人々が家に蓄えている食糧は、少ない人であと2日分、多い人でも30日分しかない。人々は食糧の蓄えが底をついたら、日雇い仕事を求めてゴンダール、ゴジヤム、ワレガ等比較的豊かな州に旅立とうとしている。人々は水源として各地に散在する泉を使っているが、そのほとんどが涸渇していた。水が多少残っているところでも、1時間かけて20リットル程度の壺がようやく一杯になるぐらいである。また日照りのためにコレササと呼ばれる病気が発生し、家畜が死につつあるという。

(2) 緊急食糧援助

7月30日、ついに大雨期の雨が降り始めた。しかし、たとえこの雨が降り続き、作物が順調に育ったとしても、収穫は12月以降になり、それまでの期間をしのぐ日々の穀物が足りない。そこで、JVCはコレブ地区の中でも特に食糧備蓄量の少ない農民8000人を対象に食糧配給を開始した。土壤保全のための石積みや道路補修等、簡単な労働を行ってもらい、その報酬として1日3kgの穀物を配る。いわゆる food for work というやり方である。この活動に必要な食糧は、エチオピア政府機関から調達したものの、首都から550kmにわたる悪路の輸送経費500万円は日本で集めねばならない。

エチオピア全体状況

この8月14日、エチオピア政府は各国大使、国連機関、NGOsを招集し、本年後半以降に予想される食糧危機に関する緊急アピールを行った。今回の雨

不足は北部のみならず、南部諸州を含み、7月の降雨量を見る限り、84年の大干ばつ時の記録を破っている地域もあるという。一方では、9月に予定されている軍事革命政権からの民政移管の儀式を前にコレブの状況を外部に流すなど政府から口止めされており、会議の出席者の中からも「また自分たちの政治的問題を棚上げして、物ごいを始めた。西側にしても穀物をはかせるため、援助というのは都合がいいさ」という怒りの声も見られた。

しかしながら、会議のあと政府が発送した「来年度までに95万tの食糧が必要」という主旨の手紙を国連、NGOsとともに承認している。8月28日の5mmを最後に北部ウォロ州の雨量は0となり、エチオピアで活動を続けるNGO間のミーティングでも干ばつは決定的だと結論した。

日本国内の支援体制

この3月、エチオピアからの帰国以来、エチオピア事業担当の私の頭を悩まし続けている問題は、活動を支える資金獲得についてである。マーシャ村、総合的復興促進計画の本年度予算は約4000万円、現在までに集まったのはその4分の1、このままでゆくと、今までの貯金を本年度中にすべて使い果してしまう。昨年、グリーン・フォー・アフリカ・キャンペーンを支援して下さった方から今年も続々と寄付金が寄せられていただいているが、まだまだ足りない状況だ。第一の原因としては担当者である私の力量不足・怠慢があげられるが、エチオピアのみならずJVC全体が財政的危機に陥っていることを考えると、日本におけるJVCを始めとするNGOに対する評価がまだまだ低いことに帰因すると思われる。マーシャ村での活動は海外での評価の方が高く、昨年2000万円の資金を出したバンドエイドの理事ボブ・ゲルドフ氏は、9月の来日の際にも、雨不足の情報とそれに速応しているJVCの活動に対して多大な関心を示した。またエチオピアで活動しているNGO連絡会議もNGO間の総互評価の下に700万円相等の支援をしてくれた。

今、マーシャ村では、植林を始めとする教育普及活動が実を結びつつある。JVCのエチオピア人スタッフに指導を受けた母親たちは、自分の村に帰って近所の母親にマザースクールで得た知識を教え始めたという。緊急事態に対しては、85年のような惨事を招く前に迅速に対処していきたい。皆様からの継続的なご支援を期待してやまない。



通り雨

低地のコレブ地域へ向かったのは、干ばつ決定の日、7月28日であった。内山田さん、山田さん、エチオピア人スタッフのトーマス、私の4人は、4ドアのランドクルーザーに乗り込んだ。山を越え4時間、コレブ高地の村へ着く。(コレブとは、広範囲な地域の名称である。高地は比較的豊かである。)

ここからは、車が通れる道がないため、車を置いて歩かなくてはならない。現地のガイドを雇い、午後1時半出発する。崖の上から低地へは、傾斜が急である。エチオピア人スタッフのトーマスが先頭になったためペースが速い。下るにつれて気温が上昇してくる。1時間ほどで、崖をかけ降りる。所々に岩だらけの土地がある。トーマスに、「これは何か」と聞くと「畑だ!」と答える。表土流出により、畑は岩だらけになっている。

出発してから2時間後休憩を入れる。腰を降ろして休んでいると、進行方向の山から一筋の白い煙が立っていた。雇ったガイドにトーマスが、「何か?」と聞くと、「雨乞いだ」と言う。この地域でも、マーシャ村と同様、雨乞いをしている。15分ほどの休憩の後、またものすごい速さで歩き出す。エチオピア人2人が先に歩き、私たちが追いかけるという形になっている。エチオピア人のこの力は、どこから出てくるのだろう。細い体、少量の食事、それでもしっかりとした足どり。

疲労がたまってきた時、雲が出てきた。空が暗くなり気温が下がる。信じられない事に雨が降りそうなのだ。降りてきた後方の崖を見ると、薄い霧がかかっている。後方は雨が降っているのだ。だんだんと、その霧が近づいてくる。そして、ついに雨が降りだした。疲れた体にシャワーの様に雨が降る。「雨乞いが効いた」と冗談を言う者、雨期がやってきたと喜ぶ者。けれども、雨は30分後にはきれいにやんだ。雨期ではなく、一時的な通り雨だった。

コレブへの道

短期派遣ボランティア 桃井 拓真

しみ出た水をくむ

雨の間休んでいた私たちは、また、ものすごい速さで歩き始める。日本人スタッフの疲労が激しいので、近くの村に泊まる事となる。コレブ高地を出発して4時間半後、一行6人は、小さな村へ着く。イイオンナ(アムハラ語)と呼ばれる変わった名前の村であった。村へ入ると、奥地へ入ってきたという私のイメージとは違った光景を見た。きれいな服装をした若者が多くいる。パレーボールで遊んでいる。「ディナデラチョ」(お元気か?)と聞くと、「I am fine」と英語で答える。不思議に思ってトーマスに聞くと、政府の進める識字教育のため、ワォロ州の州都デシェからやってきた先生の卵だと言う。政府の役人がけっして入ろうとしないこの地域に、彼らは政府の指示で字を教えにきている。

彼らからこの地域の概況を聞いた後、わき水の出る所へ行く。わき水は、ほとんど涸れていた。小さな女の子たちが、かめを置き、ひょうたんで作ったコップで水を懸命にくんでいる。わき水が涸れかかっているので少し掘り、そこにしみ出てくる水を少しづつ集めてはかめに入れ、またしみ出てくるのを待っている。山田さんが一つのかめに(約20ℓ)入れるのにかかった時間を計ったところ、約1時間であった。夜になり、泊まった家のおかみさんは、貴重な食料をいっぱい出してくれた。インジェラ(エチオピア特有の料理、テフという穀物を粉にして醗酵させた後焼いたもの、ホットケーキの酢っぱいもの)、シロワット(大豆の粉ととうがらしを煮たもの)を食べる。午後8時就寝。

翌朝7時に起き朝食を食べた後、奥地のバシュロ川地域へ向かう。約1時間後、大きな村へ出る。村の人が出てくる。この地域は、政府の役人も入らない地域である。多分、外国人が来たのも初めてであろうという事だった。「バシュロ川へ行く」と言うと、村のリーダーが、「ここから先は、村がないから、私たちが一緒について行く」という。そして、私たち6人と村の人たち8人が、バシュロ川へ向かった。その村からは、また、すさまじいスピードで

降りてゆく。

2時間後、バシュロ川へ着いた。バシュロ川は、青ナイルの上流であり、乾期でもけっして枯れる事がない。昨日と違って、水には不自由しないこの地域であるが、人の気配がない。トーマスによれば、バシュロ川流域は高温で水分があるため、マラリア蚊が発生しやすいということであった。そして、水には住血吸虫が多くいるという。そのため、人々はこの流域に住まないのだった。

雨期が来た！

川の流域で休んだ後、約3時間川へ下った道を逆に登り、一緒にきた8人の村へ行く。さっそくトーマスを通訳に内山田さんが生活状態を聞く。家族の人数、食糧のストック、水の有無などである。特にこの質問の答えの中で驚いたのは、食糧のストックに関してだった。食糧のストックは、村のリーダーで1カ月分である。そして、ある人は、「3日だ」と答える。そこで、「3日後にどうするか？」と質問する。つまり、食糧がなくなった時にどうするか？という事である。すると彼は、「多分死ぬか、移住するかだ」と答える。実際、食糧は少なかった。けれども、私たちの食事にと、インジェラを隣の人々が持ってきてくれた。2年前の干ばつに比べて、エチオピアは豊かになりつつあると言われる。けれども、一度干ばつがくると、同じような状態に陥ってしまうであろう。エチオピアの奥地の人々の生活というのは、死ぬか生きるかの境界で生きているようである。その現実をかい間見たようだった。午後4時、その村へ出て、昨日泊った村へ着く。午後9時就寝。

7月30日、目が覚めると、ザーと雨の音がする。家の外へでてみると雨が降っている。本格的な雨である。やっと雨期が来た様だった。村の人々もうれしそうだった。午前9時、雨が小降りになってきたのを機会に、高地コレブを目ざす。地面がぬかるんでいたので、靴に泥がつき歩きにくい。2日前下ってきた道を登ってゆく。気温が低いので比較的楽に歩けた。テーブル台地の下まで来た時、畑を耕し始めようと、牛を引く農民に出会った。ようやく種蒔きが始まるのである。「ディナデラチョ」（元気か？）「ディナニ」（元気だ）と笑顔で答えたのが印象的だった。厳しい環境ながら、したたかに生きている農民の姿がそこにあった。1時間後、コレブ高地へ着いた私たちは、マーシャに向けて車を走らせていた。

紙芝居

子供と一緒に楽しめないだろうか？そういう発想から紙芝居が生まれた。マーシャ村へ入るまでに、首都のアジスアベバでその準備をした。幸いにも、加納妙さん（JVCエチオピア代表）がクレヨン・色鉛筆・絵の具を持っていたので、これを利用した。（加納さんにも手伝ってもらった）まず、画用紙にクレヨンで下絵を書き、その次に色鉛筆・絵の具で色付けしてゆくのである。

紙芝居のストーリーは、「アリとキリギリス」を下地とした。題して、「イエマーとカバダと木」である。イエマー、カバダ、というのは、マーシャ村周辺で多い名前である。『イエマーは、燃料の薪として山の木を次々と切ってゆく。ラバに薪を積んで、隣村のカバダの家へ行くと、カバダは、植林をしている。イエマーは、木はたくさんあるのにとカバダを笑い飛ばす。ところが、雨期になると、イエマーの畑は洪水でやられてしまう。けれども、カバダの畑は植林のため大丈夫であった。そこで、カバダとイエマーは、共に植林をする。』この様なストーリーである。全部で12枚になった。ただ絵を見せるだけではつまらないので、ラバのしっぽが動いたり、緑の山が、はげ山になるなどの工夫をした。ところで実演であるが、言葉が問題になった。現地語のアムハラ語がしゃべれない私は、紙芝居のおもしろさを表現できない。そこで、JVCマーシャ小学校のエシヤト先生に相談したところ、彼が演じてくれることになった。紙芝居は、子供教室、母親学級などで使われる予定となった。

紙芝居実演の日、50数名の子供が集まった。娯楽が少ないマーシャ村のため、子供たちは紙芝居に新鮮な驚きを示す。ラバのシッポが動く場面では笑いが起き、イエマーの畑が洪水でやられてしまう場面では、口数が少なくなる。紙芝居終了後、子供たちに質問したところ、大部分が手を挙げて答えた。子供たちは、植林の意味をそれとなくつかんだようだった。JVC学校が終わり、仲よくなった子供たちと一緒に外に飛びだした。

遊びのつもりで作った紙芝居であったが、植林を言葉で説明するより、視覚に訴えた方が、効果的であるように思えた。衛生、栄養などの方面で、紙芝居を作ってみると良いのではないかと思う。

マザースクールの笑い声 (母親学級)

佐久間典子



奪いあいの苗木

私は昨年1年間、JVCのグリーン・フォー・アフリカキャンペーンの担当をしていたのですが、現地を知らないもどかしさをずっと抱いていました。もうキャンペーンは終わりましたが、ぜひ現地を見たい、植林の状況を見たいと、今回チャンスがあったので思いきってでかけることにしました。

ちょうど私たちがエチオピアに行った7月の末、待望の雨が降り、8月第1週に待ちに待った植林をすることができました。樹種は成長の早いユーカリが主に植えられました。苗床に育った苗は40万本。5万本が土壌保全のために植えられ、残りの大半は公共施設や家のまわりに植えるように各戸に無料で分けられました。この苗木に人気集中で、バーゲンセールで奪いあうような場面も見られたほどです。でも植え方がまちまちなので、これから間引いたり、植えかえをしなければならない所も出てくると思います。

家庭訪問で

植林の合間を縫って家庭訪問にもついていきました。これはマザースクールの出前とでもいいましょうか、この時は保健教育を行っていました。その中で子供は2年ごとに産んだ方がいいという話がありました。2歳ごとに年齢の違う子供の絵が描かれていました。すかさず「この絵では背の高さが1つ違いにしか見えないよ」という声が上がりました。みんなどっと笑いましたが、それにしても女たちだけでどうしてバース・コントロールができるのでしょうか。

笑いといえばこんなことがありました。やはり家庭訪問で例のガリガリにやせた栄養失調の子供の写真を見せた時のことです。初め私は「エッこんなものを見せてもいいの。彼らが心を痛めないかしら」と思っていました。しかし想像とは違って、彼らはまたどっと笑ったのです。以前話にきいた日本の中学生が飢餓の写真を見て、「わっ汚ねーな」という反応とまったく同じでした。この写真からこういう答が出るとは思って

もみませんでした。私たちにはまだまだ先入観があるようです。

私は昨年の2月にソマリアに行きましたが、ソマリアに比べればエチオピアの方が数段しのぎやすいところですね。もちろんこれはソマリアのルークとエチオピアのマーシャの比較ですけど。気候はエチオピアの方がいいですが、プログラムを進めていく上では制約が多く、大変な所だと思いました。ちなみにスパゲティについてはエチオピアの方がおいしいです。特に現場の食事は、ソマリアではそれこそ毎日毎日同じものしか出ませんが、マーシャでは伊藤幸子さんたちのアドバイスの蓄積でずいぶんバラエティに富んだものが食べられます。幸子さんが「オヤコドン」というと、ちゃんと親子丼が出てきます。みそも自給しているし、食事はなかなかいけます。現場での楽しみといえば食べることですからこれは重要なことです。

ちなみに飲み物は、エチオピアには大麦から作る薄いビールのようなタッラと、ハチミツから作るタッジ、これを蒸留したアラキというお酒があります。

今回の訪問で最も強く感じたことは、やはり一度かかわった援助は継続しなければならないということです。特に復興とか開発に関わる援助は解決のメドがつくまでに時間がかかります。しかし日本ではほとんどエチオピアへの関心はなくなりました。JVCの活動を欧米のNGOが支えているというのが現状です。細くてもいいから長く関心を持ってもらいたい、そう思います。(談)

エチオピアの女たちは大変、スタッフも大変

赤塚 真理

現場を見なければわからないこと

以前からアフリカには興味がありました。特に自然とか人々の生活とか。そこから現代のアフリカが抱える社会的な問題にも関心が広がっていった時に、実際に自分の目で見て考えたいと思うようになりました。

現場に入ると1つ1つが驚きでした。まず感じたのは、エチオピアについて自分はこれまで随分と偏ったイメージを持っていたのだなということです。エチオピアはとても大きな国で、自然も多様です。だからアジスアベバとかマーシャ村だけを見てエチオピアはこうだと決めつけてはいけけないのではないかと思います。ほんの半日でしたが、アジスアベバから南へ100kmほど下ったナザレという町に行きました。そこではブーゲンビリアが美しく咲いていて、途中の湖では子供たちが泳いだり洗濯したりしていました。マーシャ村のある北部の自然とは、本当に対照的な感じがしました。

私は日本にいた時、どうして首都や他の地域の人が飢餓に苦しむ被災民に救援の手をさしのべないのか不思議でした。でもエチオピアに行ってみると、都市での生活も決して楽ではなく、まず自分のことが精一杯で、他の地域のことまでは考えられないのではないかなと思うようになりました。それに社会主義ということもあって情報も制限されていますし、伝わっていないことも多いのだらうと思います。

アジスアベバではCRDA（エチオピアで働くNGOの連合体）の会議にオブザーバーとして出席させてもらったのですが、他の団体が「北部で干ばつの兆候が……」と言い出し始めた時期に、JVCはコレブ地区の調査を終えて方針を決定し、援助物資の手配を済ませていました。「JVCはお金は無いけれど、常に現場とつながっていて真っ先に対応できるようにしている」とスタッフの人が言っていました。本当に行動が早いなと思いました。

女たちが苗を運び、男たちが植える

私たちがマーシャ村に入ったのは1カ月遅れでようやく雨が降り始めた時期で、村では植林が行われていました。苗木の籠を背負った村の人について山

の中腹にある植林サイトに実際に行ってみるまでは、植林がこんなに大変な作業だとは思ってもみませんでした。土を掘って植えるのは男の仕事ですが、何度も往復して苗木を運び上げるのは女の仕事です。なぜ女が運ぶのか不思議に思って尋ねてみたら、「女は水汲みとか薪集めとか荷を運ぶのに適しているから」とのことでした。村の人たちの生活を見ていてつくづく女に生まれると大変だなと思ってしまいました。もしかしたら植林も“将来”のために木を植えるというよりは、毎日の仕事の上にさらに仕事が増えることを意味していたのかもしれない。

母親学級や家庭訪問などの教育的プログラムは、地味ですが少しずつ着実に人々の中に根を下ろし始めているように思いました。出席者はなかなか熱心で和気あいあいとした雰囲気です。

母親学級や家庭訪問では保健衛生や栄養などについて教えていますが、先生をしているのはJVCのエチオピア人スタッフです。彼らのほとんどは20代から30代の若手です。彼らは自分の担当するプログラムについてとても積極的で、JVCの活動を支える大きな力のひとつになっています。

今回一番印象に残ったことは“現場って大変なんだな”ということです。ちょうどコレブ地区の調査と同時進行で植林や他のプログラムを行っていた時期でしたので、スタッフは人手が足りなくて、一人一人がすごく頑張っていました。エチオピアという国の政治的な難しさもあって、プロジェクトを進める上での細かな配慮が要求されています。神経をすり減らしながらやっている部分も随分とあるように思いました。日常的な事柄の中で理想と現実との綱渡りを常に要求されている大変さは、現場に行ってみなければ私には到底想像もつかなかったことでした。「1のやりたいことをするためには9のやりたくないこともしなくてはならない。でも日本人たちが苦勞して集めてくれたお金だから無駄なことには使いたくない」という現場のスタッフの言葉が心に残っています。今私が思うのは、せめて現場で頑張っている人たちがプロジェクト資金の心配までしなくてすむように、何かの形で少しでも役立てれば……ということです。（談）

ホームステイの村で

桃井 拓真

雨乞い

僕がなぜエチオピアに行ったのか。少し自己紹介します。僕の家は教会なので小さいころからアジア学院の研修生などが来ていました。自然に第三世界について関心を持つようになりました。そして小学生の時に聞いた岩村先生^(注)の話に感動してから、ぜひ自分もアジアやアフリカの人を助ける医者になりたいと思うようになりました。しかしやがて病気を治す前に十分な食糧がなければならぬと、医者になるのはやめて農学部に入りました。

その様な理由で JVC のエチオピアのプロジェクトは僕にとって大変興味があつたのです。アフリカについての知識があまりないため、第一印象を大切にしました。JVC のマーシャ村のエチオピア人スタッフは、自らリーダーシップをとって農民を勇気づけていました。その姿が印象に残りました。

僕は6月末に今エチオピアでコーディネーターをしている山田盛さんといっしょにアジスアベバに入りました。マーシャ村に入ったのは7月中旬です。農作業と植林の手伝いに行ったはずなのに、雨がまったく降らなくて何もできない状況でした。村の長老は「7月5日までに雨が降らなければ干ばつの予兆、7月28日までに降らなければ干ばつだ」とっていました。

とうとう雨乞いが始まりました。長老がチャットという覚せい作用のある葉を200枚も300枚も食べ、「バラカフン、バラカフン」とお祈りの言葉を唱えていきます。そこには20人ぐらいの男女がいたのですが、みんな興奮状態で、彼らも「アミ、アミ（下さい、下さい）」と唱えるのです。3時間以上もこういうことが続いたでしょうか。最後に長老がツバキをパッと吐きかけ、それを村人が口で受けとめます。こんな雨乞いが8月末に雨が降り始めるまで何回も行われました。彼らがいうには前回の干ばつのことを忘れ、お祈りを怠ったためまたこんなことになってしまったというのです。

植林の意味

僕は干ばつの影響が特に現れている低地の村やコレブを視察したあと、マーシャ村から歩いて1時間



ホームステイした家

の地区で1週間ほどホームステイしました。もっと現地の人の生活を知りたいと思ったからです。その家は夫婦と子ども3人、それに妻の親せきの子どもの7人家族でした。その家は村1番の金持ちでしたが、食事は午前10時ごろの朝食と午後9時ごろの夕食の2回。それもインジェラと煮豆だけで、僕のいた間に1度も肉はおろか野菜もほとんど出てきませんでした。でも必ず2回は食べられたのですからぜいたくは言えません。

この家の女主人はエチオピアには珍しく発言力があって、婦人組合のリーダーもしていました。そのような関係上から僕もホームステイできたのです。まあ、この家で驚いたことはいろいろあるんですが、まず食事は大人たちから食べること。彼らが食べ終わってから子供が食べます。そのため子供たちの食べる分を考えてインジェラを食べなければなりません。それはそれでいいんですが、困ったのはノミです。動物と同居しているので無理もないのですが、腕とか足とか5000カ所も食われてしまいました。ほんとにかゆかったです。

この家には3人の子供がいて真ん中の15歳の男の子が通訳をしてくれました。彼は「学校で1番成績が良い」といっていました。彼はふだんアジバールの中学校に通っていますが、たまたま夏休みなので家に帰っていました。エチオピアは社会主義になってから識字教育に力を入れているようで、こんな田舎に、という所にもりっぱな小学校があります。もちろん植林教育にも熱心です。例の彼が言うには「木を植える大切さは知っている。木を植えて森を作れば、いろんな昆虫も集まり、動物も増える。動物が増えれば観光客が来る。そうすればエチオピアもケニアみたいに外貨収入を得られるのだ」。(談)

(注) ネパールで医療活動が続けている岩村昇博士。

エチオピアのプロジェクトがわかるために

〔答える人 林 達雄〕

■種子銀行とは何ですか。どのように運営していますか。

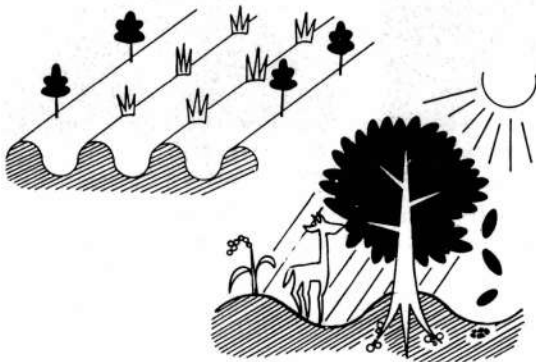
作物の種の貯えが少なかったり、耕作に必要な役牛や農具を持たない農民。あるいは干ばつの時期に失った人々のための互助組織です。種まきの時期に土地に合った種の貸し出しや、役牛の低利ローン販売を行っています。

JVC が出資者となって発足しましたが、管理運営は村の代表たちが行っています。他の NGOs も、村の復興のために種子銀行を始めつつあるようです。

■アグロフォレストリーとはどういう農業ですか。エチオピアではどんな作物を作っていますか。

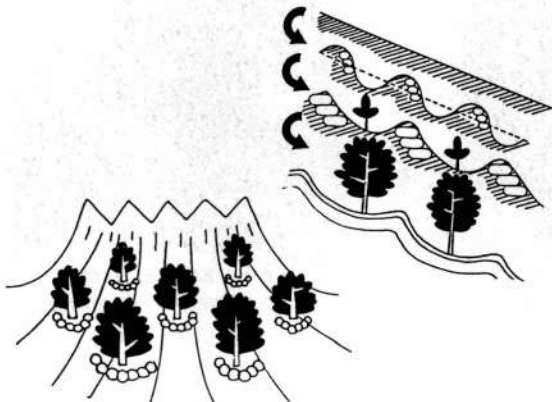
作物と樹木を同じ畑に混作する、立体的な土地利用の方法です。名称は新しいですが、実は古くから世界各地に見られる農法です。樹木が根を張るため、保水効果があります。養分が分解されるので栄養として吸収されやすくなります。

エチオピアでは成長の早い豆科の木の間には豆類や麦類を植える実験が行われています。



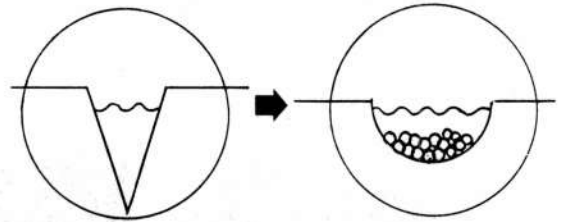
■テラッシングとは何ですか。

山の斜面に段差を作り、石積みをして表土の流出を防ぐやり方の1つです。植林の前に行われることが多く、現在もエチオピアの植林事業の際、広く行われています。



■チェック・ダムとは何ですか。どういう所に作るのでしょうか。

エチオピアの雨期の激しい雨は、谷底を深く刻り取って流れます。チェックダムは川の途中に石の堤を作って、流れを緩和させます。



■JVCのプロジェクトの対象はどんな人々ですか。何人ぐらいいますか。

マーシャ地区の9つの村に住む、農民、婦人、子どもたちです。約1万4000人。

■マザー・スクール（母親学級）では主に何を教えていますか。

マザー・スクールで学んだ婦人たちは、家に帰って自分で実践し始めたり、学んだことを近所の母親たちに教え始めました。

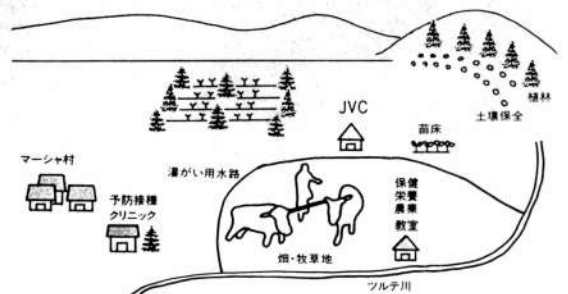
今まであまりなじみのなかった野菜を使った調理の仕方、家庭菜園の作り方、木の植え方、離乳食の作り方、与え方、健康を守るための基礎的な知識などを教えています。

■植林にはどんな木を植えますか。これまでどのぐらい植林したのでしょうか。

木の種類としては、4分の3がユーカリです。成長が早いこの木は薪炭や家の材料、水土の保全用に使います。残りはエチオピアの高原をかつて被っていたといわれるヒノキやアカシアの類を植えます。

全部で40万本ほどの苗木を約1年間かけて作り、その1部を水土の保全林として水源池近くの斜面に植えました。残りの大半は村人たちに配り、家の周囲に植えてもらいました。

■エチオピアのプロジェクトの全体像を図で描くとどのようになりますか。



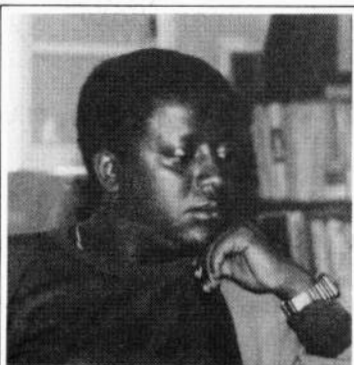
エチオピアのスタッフを知っていますか？

日本人スタッフの場合、報告会やT/E誌上でその人柄に触れる機会があります。でも、日本には伝わってこない現地スタッフの素顔。どんな人がプロジェクトを進めているのか、知りたいと思いませんか？

あるエチオピア人スタッフの最初のひと言。“僕のこと知ってる？”——意外に心に残っています。皆、本当によく頑張っているなあ！というのが私の素朴な感想。現地での取材(?)には、日本人スタッフのみんながワイワイと協力してくれました。JVCエチオピアの“顔”の輪郭は、前向きで一途です。

(赤塚真理)

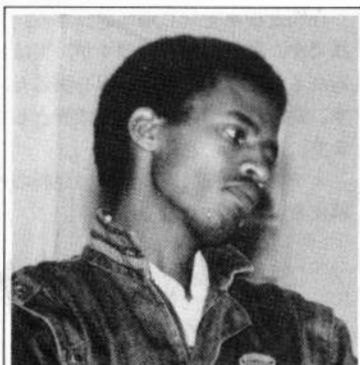
アジスアベバ事務所



ダニエル (Daniel) 26歳
アジス事務所で事務を担当。ドライバーにもなる。冗談のわかる柔らかな人。アジスっ子。ファッションセンスは“ピカイチ”！



フェテロワルク (Fetlework) 29歳
アジス事務所の事務と会計を担当。テキパキ仕事を処理する有能なキャリア・ウーマン。明るいおしゃべりとケーキが大好き！

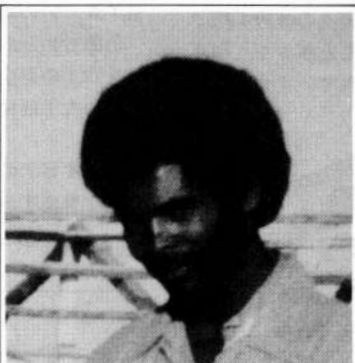


アリ (Ali) 23歳
若くても運転歴6年の熟練ドライバー。仕事の都合でアジスにいたり、マーシャにいたり。おっとりとして誠実な好青年。

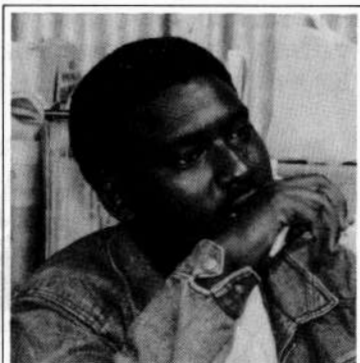
マーシャ村



イエットベルク (Yietbarek) 34歳
英語が堪能で有能なコーディネーター。鋭い眼光で相手を黙らせるスゴイ奴！その判断力には定評あり。



ソロモン (Solomon) 29歳
仕事に対して一生懸命な農業担当。種子銀行も担当。“キャラメラちょうだい”なんていうズッコケおじにいさん。



エシャトー (Eshetu) 26歳
母親学級、子供クラブ、家庭訪問など、教育を担当。根気強く優しいので子供たちに人気抜群！調理士としての経験もある多才な人。



バレッタ (Belete) 32歳
エチオピアのトラック野郎！
物資担当。デシェからアジバールの倉庫へ物資を輸送する。孤独な旅の友は“八代亜紀”。渋い！



ゲテネシュ (Getenesh) 20歳
愛称“ヌヌちゃん”。会計担当。
明るく気さくな彼女は、カタコトの日本語が誰よりも上手。
フェテロワルクの妹。



シュクール (Shikur) 21歳
向学心に燃えている農業教室担当。
テラッシング、植林も担当。マーシャ出身。外見は真面目。でも、踊りだしたら気分はトラボルタ。



アリ (Ali) 40歳
倉庫管理、物資の配給を担当。マーシャ出身。物静かな彼は、言葉よりも笛の音色で語る詩人。歩く速さは時速8km！



タスファイ (Tesfay) 21歳
愛称“シッタ”。泉の保護を担当。
デシェ出身。馬にかけては右に出る者なし！情熱的にJVCの意義を語ります。



フカドー (Fukado) 36歳
クリニックに関する交渉を担当。
流暢な英語で、しゃべり出すと止まらない。3児の父。



トーマス (Tomas) 21歳
チェックダム、テラッシングの担当。
ハードなコレブ地区の調査に毎回狩り出されている期待の若手。
ソロモンの弟。



赤塚真理 26歳
日本においては誠実なカウンセラー。
エチオピアでインジェラのとりになりました。シッタにナンバー3と賞された有望な騎手(佐)。

遅れた雨

伊藤 幸子

6月の下旬、昨今の頃はドシャ降りの雨。

トタン板にあたる雨の音がうるさくて、しゃべる声も聞えなかった。あれが雨期。それなのに今年はどうだ。スコーンと青空。雨雲のけはいもない。7月になる。まだこない。青空。

アッラーに祈っている。

祈りが届かないのか、それともアッラーのお怒りが大きいのか、7月中旬になっても青空、青空、青空。この青空のもと、せっせと働く人がいる。小雨期作の収穫風景。女が刈った穂をどっさり背にしょって家へ向う。男は、ロバ、馬、牛など、ありとあらゆる家畜を動員して脱穀に休むひまもない。とにかく、カンカン照りで仕事ははかどる。ところが、5月6月に播いた、大麦、トウモロコシは、まだ小さくて、今、雨がほしい。金色に光る大麦と、その隣りで水不足であえいでいる大麦、トウモロコシの苗。今、雨がなければ、この苗が枯れるのはもちろん、大雨期作の大麦の種子がまけない。大麦の種子が今まけないということは、もうすぐ食べ物がなくなることを意味している。来年分の食べ物がない？食べ物がなくてどうして生きていけましょう？

農業教室で種子銀行の集会の時、家庭訪問の時、会う人ごとに食べ物の貯蔵はあるか、干ばつに対して何をするのか、泉は涸れないのか、などなど話し合い、聞いて歩く。低地の視察もしてみた。今までにも何回となく経験している干ばつ。83年84年の干ばつの痛み、つらさは忘れてしまったのだろうか。何もできない自分に腹をたて、ムジャクシャし、イライラする。日本でいったい明日の食べ物の心配なんかしたことがあったかしらん？農民が水不足だろうと、米はあるものと信じてしまう頭。米びつに米がなければ、店屋に買いに行けばすむことと信じている頭。お金をにぎっていさえすれば、食べ物のなくなる心配などしなくてすむ世の中。

ここは、雨がなきゃ、結局飢え死にするしかない。干ばつに少しでも対処するためのこのプロジェクト。自分で自分の身を守るように備えるように。ところがどっこい、努力の人に対して、他の人がどう感じ

るか。努力して良い収穫を得たと思ったら、放火されたという話を何度聞いたことか。しっと深い人たちよ、そんなに人の足をひっぱってくれるな。ああ、それにしても、雨がこない。と、干ばつ対策の話しあいをしていたら、7月29日、雨がドーンとやってきた。雨が降り始めたのです。雨、雨、まったく遅くやってきた雨。この雨で生きのびる苗もあるでしょう。耕す男と牛の姿も見えるようになって。ただし、大麦には遅すぎて、小麦、テフ、豆をまいている。これが来年の一家をささえる。豊作になってくれれば良いが。

エチオピアのらばとわたし

佐久間典子

エチオピアにコーディネーターとして山田盛さんが赴いて1カ月後、アディスアベバで再会した彼のこめかみに目がいったわたしは、その変化については尋ねることをはばかった。が、マーシャに着いて、らばから落馬したケガのためと知った。ムムッ、これはこわい。

日本を出る前に、雨期なのでもしかしたら、ろばに乘らないとマーシャには行けないかもしれないと聞いていた。そのためにろばにまたがるのに十分なゆとりのある雨具を用意もした。けれども、雨期の始まりが遅れたため、四輪駆動車で無事にマーシャ着。やれやれ、ろばには乗らないですんだと安心していったところに、彼の「落馬の傷あと」を見たわけである。（ここで、ろばとらばの関係について。らばとは、「雌馬と雄ろばとの間にできた雑種。耐久力があり、粗食に耐えるので、労役に使う」そうだ。わたしはそのことに無知だった）

マーシャ村プロジェクトは9つのカバレ（農業組合）を対象にしている、その活動地は広い。できる限り多くの活動を見たいところだが、徒歩で行ける範囲に限ろう、と固く思った。わたしは絶対に落ちる、もっとひどく、という確信があった。小学生の時飛び箱ができなかったという過去のデータにもとづく自信。

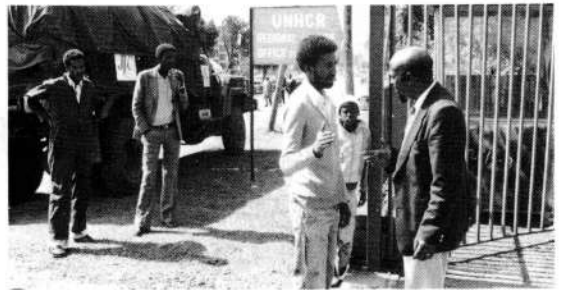
しかし、そのときは思いのほか早くきた。わき水の保護のために小屋を作っているのを見にいくのに、乗らなければならない。見たい気持ちが不安に勝つ。➤

スーダン難民への緊急援助

林 達雄

87年5月29日、UNHCRがエチオピアで活動続ける8 NGOsを招集して開いた緊急会議で、スーダン南部からエチオピア西部に2万人の難民が流入し、保護を求めているという報告を受けた。JVCは早速手持ちの8トントラックに、アジバールの倉庫に眠っていたビスケットと毛布を積み込み現地へ急行した。6月1日、首都アジスアベバから西に580km、JVCの活動地マーシャから1100kmの国境沿いの町ツォレには、裸同然の難民たちが集結していた。JVCのトラックは、他のNGOどころか、国連機関の救援部隊に先んじて現場に一番乗りした訳である。

2万3千人の難民たちは、青ナイル沿いに住むトルック族、エデック族の農民である。キリスト教徒である彼らはスーダン政府軍からの迫害を受け、家を焼かれ、財産である山羊・牛・羊を棄て、175kmを丸2日間歩き通してエチオピア国内に逃れてきた。JVC調整員イエットベルク氏の報告によれば、彼らは、イスラム教徒である政府軍からの攻撃に備えるため、スーダン解放戦線の保護を受け、約1週間だけ仮住居を作りあげた。食糧不足に加え、病人が続出



しているが、処置のできるのは解放戦線の医務官2人のみで、様々な病気に対処し切れず、ほとんどの病人は家で寝るのみであった。

その後、UNHCR・NGOの協同作業で食糧配給・医療活動が迅速に行われ、事態は落ち着きを見せた。JVCは、トラックによる食糧・必要物資の輸送を約1カ月間担当し、引き上げることを決定した。短期の活動ではあったが、一番必要な時期により仕事ができたとする。

現場の担当者の判断で、必要に応じて迅速な対応をしてゆく。これこそ、小まわりの効くNGOならではの活動の1つである。政府・国連機関等、巨大な官僚機構をかかえた組織では、常に本部におうかがいを立てねばならぬため、機動力という点からいえば、後手にまわることもままある。NGOとしての誇りを失わず、今後も活動が続けていきたい。

白い小さい馬と、それより大きい茶色のらばが、赤塚さんとわたしの前に連れてこられた。表情が恐怖でひきつっているわたしと共に、エチオピア人スタッフでナンバー・ワンの乗り手と自他共に認めるシッタが茶色の温和だというらばに乗ってくれることになったが……。「落ちる」より前に問題があった。自力でらばに乗れないのである。足が短い、体（特におしり）が重い、運動神経が欠如している、というスタイルの面はともかく、日本における日常生活ではとりわけ支障にはならないことが、相乗効果となって、わたしを困惑させた。どうにか彼が「荷物」を積みあげ、めざす湧水に向かう道で、バリバリに緊張しているわたしの背中の中から、「ガンバレ、サクマ」の声。徐々に小さな心配、大きな安心となつて、ナイトに助けられた姫君の気分——

唯一の、楽しい乗馬体験をマーシャの思い出にし、アジバールに向かってマーシャを発つはずだった。その日曜の朝、最初の川を前に、わたしたちは引き返す。渡れば車が流されるかどうか、という流れ。夕方二度めの挑戦。水は引かない。あくる月曜日、

らばで行くことに決まる。今度は乗るのは一人で。赤塚さんと桃井くんの生き生きした表情とはネガボジの顔のわたし。前日の出発のときに胸にわいた感慨も、生ずる余裕はない。第二苗床から山間の植林サイトに向かう「山登り」に、ゼイゼイ言いながらも、みんなのやさしい申し出を断って離さなかったこだわりのカメラも、モチロンらばの背にのるカバンの中。しかし、人間の適応性には驚かされた。いつしか小枝のムチを軽くあてたりするくらいになったのだから（わたしの手にあると役立たずのため、取り上げられてしまったが）。それよりも賛嘆したのはらばの強さ。黒土のぬかるみ、ゴロゴロの石の道もペースを崩さずトコトコ歩く。森林伐採が進んではげ山となったときの川の流れはこれか、と納得する急流の中も、揺れるつり橋も、エチオピア人スタッフの導くまま、らば自身の身体と、人間の体を支えながら、渡ってくれた。

6時間半ののち、アジバールへ。生命の綱を握ってくれたスタッフに“アマッサグナロ（ありがとう）”。そしてありがとう、わたしのらば。

タイの現実にあふれる旅

タイ第2の人口を抱える“難民村”
干ばつに苦しむ東北部

スタディツアー担当 岩崎美佐子



JVCが独自に募集して実施するタイ国へのスタディーツアーは、それを組織する人的エネルギーの不足、事前研修の場所捜しの困難さ、金銭的な問題＝安い予算内に収めることの難しさなどの理由で、ここ数年中断されていた(MIRC※と合同のツアーは年2回、続けてきた)。しかし、より多くの人たちにJVCの活動を知ってもらい、また、難民、スラムの人たち、農村の人たちと直に会い、その心を知ってもらうためには、スタディーツアーが最善の方法であることから、久し振りに再開した。期間は8月1日から10日間、参加者は社会人4名、学生3名、うち女性2名であった。

事前研修

事前研修は、JVC東金農場で行った。

事前研修の目的は、訪問国やその周辺の地理、歴史、文化といった基礎的な知識をできるだけ学んでもらうこと。また、日本での私たちの生活、つまり、住み、食べ、着ていることと、東南アジアや他の国々との、気づきにくいけど、実はとても深い関係を知ってもらうこと。そしてさらに、できるだけ白紙で臨み、感じ、考えられるよう、それぞれが持っている先入観をはぎ取ってもらうことなどである。

しかし、今回の事前研修がうまくいったかどうかはわからない。というのは、しっかりした時間割りはあったものの、教室らしい教室で、先生らしい先生から講義を聞くという形で行われたのではなく、JVC東金農場の宿舎の古い擦り切れた畳の上に車座になって行われたので、かっこうがつかず、なにかしら、雑談めいてしまったからだ。

都市スラム

今回のスタディーツアーでは、ナンシー、モナリザ、アソーク、クロントイなどで、JVCの活動をみたり、保育所や内職中の家庭を訪問したりした。

※モラロジー国際救援運動推進委員会

バンコクがただの湿地から、チャオプラヤ川上流のアユタヤへ向かう海外貿易船交通の要所として賑わいを見せるようになり、やがてビルマとの戦争で破壊されたアユタヤに替わって首都となってから、200年。国内外からたくさんの人たちが移り住んで、今では人口600万人の大都会となったのであるが、仕事が決まってからバンコクに住み始めた人、あるいは財産を持ってバンコクにきた人以外は、最初はみんな自分の住む家は自分で作ったのではないだろうか。湿地だったので、中国人は舟の家に住んでいたし、タイ人は高床の家に住んでいた。ひとりがなんとか住めるようになると、あとは家族、親戚、同郷の人、友人、友人の友人その他、細いつてをたどって、どんどん転がり込んできたはずだ。スラムはその延長線上にあると考えればわかりやすい。

スラムの最大の問題は立ち退きと、不安定な収入である。いわゆる日雇いの仕事はいつもあるわけではなく、しかも働きたい人はいっぱいいるのだから、多くの人が月のうち半分くらいしか仕事にありつけない。農村と違って、バンコクでは現金収入が無ければ暮らせない。せめて子供たちが成長したあかつきには、少しでも安定した職業につけるよう、義務教育(6年)を、さらに中学校、専門学校などにも行けるよう学資の援助を、というのがJVCの奨学金活動である。しかし、スラムでは進学する子どもより、小学校を卒業するやいなや親を助けて働く子どもの方が圧倒的に多い。蓄えがなく、その日暮らしなので、明日の幸せよりも今日の食べ物の方が先決問題だからだ。今日なんとか食べなければ、明日もないのはわかっているのだけれど……。

バナニコム

私たちがここを訪問した日に、数家族のカンプチア人が日本に向けて旅立った。彼らは昨年の暮れに、国境のカオイダン・キャンプでの審査で日本定住が

決定し、1月にここに移され、ずっと出国を待っていた。同じ時にここに移された人たちのほとんどはもう日本に定住し、残っていた人たちの約半数に、たった数日前に許可が降りたとかで、ばたばたと荷作りをしていた。忙しいなかにも嬉しさを隠せない彼らに比べ、何度も同胞を送り、今回も残されてしまった家族たちの落胆ぶりははた目にも気のどくなほどで、その気になれないのか、JVCの日本語学校の欠席者も多かった。いつとは言えないが、それでも未来が見えている彼らは、しかし幸運な方なのだ。国境には未来の見えない人たちが30万人も暮らしている。

サイト2 難民村

「タイ第2の町がどこか知っている?」「さあ、ナコンラーチャシマかな」「ハジャイだろう」「いやサイト2なんだ」という冗談は笑えない。実際は15万数千人であるが、彼らは、国境線に沿ったカンブチア領内の居住地を何度も攻撃、破壊され、ついにはタイ領内のこの地に集結せざるを得なくなったのである。旧インドシナ三国を自分の傘下という東西経済大国の思惑にもっとも翻弄されているのは、政治的なことにもっとも遠いところで誠実に生きてきた農村の人たちだ。水の利の悪いここでは、毎日の水を含めて、生存に関するすべてを外からの援助に頼っている。水はトラックにして1日のべ300台、50キロも離れた貯水湖から運ばれている。

東北タイ農村

今年の異常な干ばつは天災なのだろうか、人災なのだろうか。稲作をほとんど天水にのみ頼っている東北タイは、10年に1度ぐらいの割り得水不足からまぬがれることはできないが、こんなに雨のない年はかつてなかったそうだ。しかも局地的ではなく、タイ全土に雨が降らない。いつもの年だとこの季節には緑一色の水田は哀れな土裸。所どころに見える黄緑はといえば、伸び過ぎて枯れかけた苗代だ。

スリンの町でいくばくかの食糧を買って、私たちは申し訳ない気持ちを抱きながらも、民宿させてもらう村へと向かった。村で話題になるのも干ばつのことばかり。「8月中に2、3度の雨がなかったら今年の収穫は見込めず、やがて米が底をつき、ほとんどの家庭では子供たちをバンコクへ出稼ぎにやらざるを得ない。働き口のルートはあるものの、今年は全国的な飢饉だから競争は激しいので、うまく職に

つけるかどうか」と村長さんの顔は暗い。

タイでは子供の労働が大きな問題になっているが、食べられないという現実と直面したとき、子供、年頃の娘、年頃の息子あるいは働き盛りの父親の誰が出稼ぎに行くのかは、その村その村の選択であり、慣習である。隣接した村でさえ、選択は違うし、子供を働かせてはいけないと言っても彼らには他の解決方法がないのだから難しい。

村長さんの家では雨不足を想定して、親戚や子供たちも総動員して水田に陸稲の種蒔をした。

民宿した家の1軒に病気の子供がいた。小学校を卒業するまでは元気だったのに、だんだん痩せてきて、力もなく、16、7歳の今ではほとんど寝たきりで過ごしている。スタディーツアーのメンバーに看護婦さんがいたのであれこれ質問してみると、若年性糖尿病であることがわかった。村には医者はいない。

数カ村に1つの割で設置されている保健所が別の村にあることはあるが、たった1人の保健婦も不在がちで、この村には1年に2回ほど巡回してくるかわらないかだという。彼はもう目にも障害が現れており、インシュリンを打ち続け、栄養のバランスのよい食事をしなくては死も間近だというのに、そのどちらもかなわない。この村では場所がらと水不足とで、タンパク源の魚も蛙もほとんどとれないという。彼が難民であったなら、きっと適切な治療がほどこされていたであろう。栄養を考えた食事にも手に入る。自由のない、矛盾した存在であるが、食糧と医療は完備している難民と、自由な、しかしあまりにも死と隣合わせで生きている農民を比べることはできないが、無力感にさいなまれる。

このあたりにはもう林は残っておらず、畑の野菜も枯れ、多くの家で副食がない。ご飯だけでは喉を通らず、それに塩と「味の素」をかけて食べている家庭が多いのにはびっくりした。十分な食糧と、正しい知識が入る前に、「味の素」だけ入っていることの恐ろしさに気がついている農民はまだほんの少数しかいない。多くの人たちが「味の素」を食べれば色が白くなると信じている。ちょっと黒く、それを気にしている彼ら（クメール系）に誰がそのような嘘を吹き込んだのだろうか。多量の化学食品を取り続けられれば身体に害があることははっきりしているのに、しかも他の栄養がすべて足りないというのに、売れさえすればいいという商法に何とかして一矢を報いたいものだ。

同じ土の上で 同じ暑さを感じる

高田 利恵



こうして、紙の前で四苦八苦している私に、行きつけの食堂のメー（お母さん）の写真が笑いかける。その太っ腹な笑顔を見つめっていると、1カ月間に関わった、大ぜいの人々の笑顔も浮かんでくるから不思議だ。そして、このことは同時に、援助される国という言葉からの私のイメージを混乱させる。

そこはさりげなく貧困があった。青い空、草をはむ牛、道を横切るアヒルの群れ、両側に広がる赤い大地、点在する緑の木々。色彩豊かな風景である。……しかし、しばらくして気づく。働いている人々がいない。田に水がないので仕事にならないのである。また、こういう事もあった。冒頭で述べたメーとの交流が私たちの心なごむひとときだった。

ある晚いつものように食事をとっていると、メーが私たちのテーブルに来て向こうから女の人を呼ぶ。女の方は少しにはかむ感じだったが、メーはにこにこしながら私たちのリーダーであるカモン氏に話しかけている。後で聞くと、その女の方はいわゆるコールガールで、1晩600バーツ（1バーツ≒6円）。こういう職の人がここには7人いるという。それで、どうかね、ということらしい。あまりに明るく、オープンに行われた商談に、身売りを容認する社会を見た。

また、そこにはさりげなく緊張があった。村の家々にはアヒルが十数匹いて、ガガッいいながらちょろちょろしているし、犬がダラーッと寝ころんでいる。子どもたちは、はにかみながらも来客への興味を隠さず笑顔を見せる。平和である。しかし、点在する木々は黒く燃え残っていた。これはゲリラの隠れ場をなくすための作戦である。学校ではゴムとびやサッカーに興じる子どもたちの元気の良い喚声があちこちで上がっていた。しかし、外壁は迷彩色であり、防空壕があった。

全てのセットポンプが終った日は、帰りが夜にな

った。日中の緑と赤の明るい風景とは違い、まっ暗な世界が広がっていた。そして、ものすごい光の量の雷が5秒に1回ぐらいずつ鳴る。小雨混じりの強い風。トラックの荷台は寒い。何やらこの黒く荒れた世界が、東北の悩み、苦しみを象徴している気がしてならなかった。

さて私たち学生4名とバンコクスタッフのカモン氏の計5名は、このような所で3週間活動した。内容は井戸の清掃と新ポンプの取り付け作業である。しかし、あくまでも主体は村の人々であり、私たち学生は、器材運びや、作業しやすいように場面設定をしたり、村の人の作業に手を貸したりした。2,3の村の中で拠点を見つけてのデモンストレーションであるので、井戸のまわりには10人ぐらいいつもいた。みんなにぎやかである。赤道近くを感じさせる日射しのもと、私たちもなぜか笑いたくなる。妙な一体感。同じ土に立つことの、同じ暑さを感じることの大切さを感じた。

新しく開発されたローイング・ポンプは、たしかに取り付けは簡単であった。プラスチックなので軽いし、部品も接着剤ですぐにつく。そして、ある程度自前のもので修理できる。これならきっと末長く役立つだろう、と思っていた。

デモンストレーションを見た村人は、あとは器材を持って自分たちの井戸を修理することになっていた。私たちはそれらの井戸が後でどうなったかを見てまわった。その結果いろいろな問題のあることがわかった。まず、ふたをしていない井戸が多い。これではすぐに水が汚れてしまう。また部品に欠陥があり、つけることはつけたが、用をなしていないものもあった。そして、水が地下にしみこんだ化学肥料のため、油で汚れていたり、地盤が沈下し、セメントがへこんでいる井戸もあった。

バンコクに戻ってから聞いたのであるが、ポンプの下におけるパイプのところには井戸に固定するための器具が必要らしい。ぶれると故障を早めるようだ。また日よけのための覆いもあった方がいい。デモンストレーションの時に、ふたや覆いのことはいつてあったのだが、実際自分たちで設置するということは難しいようだった。村の人に対する深い理解と綿密な計画がもっと必要だったのではないかと、思われる。願わくばこのような試行錯誤の中から、村の人たちが様々な工夫をし動き出してほしいと、勝手ながら思う。今、あの井戸はどうなっているだ

ろう。ふたはついたか、覆いはあるか……雨は降っているか……。

最後の井戸の清掃の際、はき出された水が少しでも乾いた水路に届くよう、汚だらけになりながら土を掘り、水路を作っている私がいた。水がいとおしくてならなかった。ほんのちょっぴりだけれど、村の人々の気持ちに近づいたような気がした。メーの娘から手紙が届いた。“日本のことが知りたい。私は日本の友だちがほしいのです”とあった。私もタイの東北のことがとっても知りたくなった。

井戸修理ワークキャンプに参加して

この思いを 生かしたい



渋沢 文生

自分は現在大学3年生です。今回初めてJVCの活動に参加させていただきました。

3年ほど前、アフリカの飢餓が問題とされていた時、新聞でJVCを知りました。大学生という一番自由で、物質的にも豊かな中で、飢餓という言葉はその当時の自分にとって考えさせられる事でした。

学生は本当に物にあふれています。車、ステレオ、ジャケット、だんだんとお金の感覚が麻痺してきます。コンパだの、ドライブだの何でも自由です。「これでいいのかな。もっと大事な事があるんじゃないかな」。そんな思いが大学生活中ずっとくすぶっていました。一度外から自分たちについて見てみたい、考えてみたい。そうすることで何か見えてくるんじゃないか。そんな事が今回の参加の動機のようなのです。

7月中旬、この田舎者はまず東京へ事前研修へと、大荷物を背負って出発しました。はて「事前研修」、これはりっぱな雑用でした。雑用といっても、JVCの活動が本当に小さな活動から成り立っている事が理解でき、また地方の者にとって遠かったJVCの存在を身近に思う事ができました。

首都バンコクでの第一歩は、人と車の多さに驚か

されました。見るもの聞くものが自分にとっては異国であり、じっと街を見ているだけでおもしろいものでした。屋台、サムロ、働く子供たち、活気に満ち、あたかも毎日がお祭りのようでした。

カンプチア国境付近での作業は、思っていたほどの暑さは続かず、スコールの多い毎日でした。ポンプの取り替え作業自体はごく簡単なものでしたが、ほんのわずかな水を空カンで汲み上げている子供たちを見て、日本での自分たちの水に対する考え方について反省させられました。

タイという国は、今までの自分にとっては遠い国でした。今回の参加を通して、タイ、あるいはカンプチアについて様々な事を知ることができました。日本が膨大な援助を行い、大量の日本製品が流れ込んでいる国タイ。ベンツが5、6台並ぶ邸宅の隣にスラムが点在するバンコク。日本の援助、技術によって完成した高速道路のすぐ下に生活する人々。毎晩ホテルの前に立つコールガール。日本の豊かさの根底には確かにアジアの貧しさがあるようです。

大量にやってくる売春ツアーの日本人。日本へ向かうじゃばゆきさん。経済大国の看板を掲げて進出する日本企業。そして日本人のほとんどいない難民キャンプ。日本、日本人のやり方が見えてきます。「何やってるんだろう」。そんな思いがかけめぐります。

今だにゲリラによる戦闘が続いているタイ国境。タイにいる難民キャンプの人々。言葉では知っていても直接自分の目で通してみると考えこんでしまいます。もっと自分の知るべき事、考えなければいけない事がたくさんあるように思います。

では自分たちには何ができるか。今までの思いをどう結びつけて行動できるか。タイ滞在中も、一緒にやってきた仲間とよくこんな話をしました。「所詮、何もできやしない」そんな風という人もいでしょう。たしかに、いざ行動に移すということは難しいです。これまでも自分は何もやってこなかったのですから。JVCで実際に活動している人たちには感心してしまいます。

それでも、このワークキャンプで得ることができた今の思いを、なんとか実際の行動に結びつけたいのです。あのJVC事務所の“雑用”のようなほんの小さな事からでもいいと思います。今回参加した事で、いろいろな面において勉強させていただきました。自分にとって来年は就職活動など大事な年ですが、今回の経験は必ず生かしたいと思っています。

SHAREにとっての当面の課題

SHARE運営委員、医師 本田 徹

前回「T & E」に小文を寄せて以来、早くも2年半の月日が流れ去った。SHAREはこの間にどれくらい成長したのか？ JVCからの乳離れは進んだのか？ 胸に手を当てて考えると、恥ずかしさに堪えない所もある。

2年半前はちょうど、エチオピアの緊急医療救援が本格化した時期で、私たちは波頭に乗ったような昂揚感に捕えられていた。その折り私は「T & E」の中で、「日本の内と外とを活発に往還するような運動体の形成を目指したい」と語った。こうした抱負を当時は、ちょっと手を差し延べればすぐ届きそうなものとして表明していたと思う。今でもそれをrenounce（放棄）したわけではないが、自分たちの初心をかなえるためには、人並み以上の努力・結束・工夫・献身といったことが必要だと痛感するに至っている。満4歳児となったSHAREは、今や自ら課題を設定し、その実現に向けて奮闘して行かねばならないのだ。

その意味で当面最大の設定課題となるのは、(1)カンブチア保健・医療プロジェクトへの参加、(2)SHARE友好病院の建設、である。

(1) カンブチア保健・医療プロジェクト

1982年頃より、カンブチア国内での保健・医療活動は、緊急事態への対応ということから予防・教育活動へと、重点が移されていった。当面主要な目標となるのは乳児死亡率の低下であろう。（1985年で145/1000）。このため1983年以来、プノンペン市内の国立小児病院を皮切りに、RINEプロジェクトが各地で展開されている。

RINEとは、Rehydration（経口補水療法）、Immunization（ジフテリア、百日咳、破傷風、結核、ポリオ、はしかの6疾患に対する予防接種）、Nutrition（補助給食）、Education（母親に対する衛生、栄養教育）の略である。要するにこれは、母子保健のための包括的なプロジェクトと言えるだろう。現在RINE計画は、プノンペン市内9カ所の他、カンダール県など首都に近い7つの県で実行に移されている。87～88年には、さらにいくつかの県および郡

（Srok）レベルで開始される予定である。

この度私は、88年からのJVC/SHAREのRINEプロジェクト参加を政府、NGO関係者と話し合うため、プノンペンを訪れた。私たちの担当する地域についてはいくつかの可能性があり、県・郡部でのRINE計画に責任をもつ母子保健局アンサルーン女史などとの交渉の結果、一応スローク・プノンペンという人口約6万人の郡部で開始する基本的な合意を得た。行政当局との折衝は今後とも続くが、それ以外にUNICEFやワールド・ヴィジョン（アメリカのNGO）などからの助言・協力も不可欠である。

国内的には、資金調達と医療スタッフの確保が鍵となる。

(2) SHARE友好病院（仮名）

私たちはInformal Groupとしての柔軟さ・開放性は保ちつつも、財政基盤、海外プロジェクトの立案・遂行、医療ボランティアの派遣などの面では自立を進めていかねばならない。また、開発途上国で保健協力を目指すことと、日本国内で「地域医療」を実践することが、内的にどう繋がっていくのか、方法論としても経験としても私たちは掴み切っていない。そこで、以前からSHAREの拠点病院を持ちたいという念願があった。幸い、埼玉県下にそうした医療機関を作る展望が生まれてきた。まだ障害は多いが、なんとかこの病院構想を实らせたい。「T & E」読者の皆さんの温かいご支援をお願いして筆をおく。



9月の動き

九十九里・山辺の郷フェスティバル

去る9月18日(金)～9月27日(日)までの10日間、東金では、九十九里・山辺の郷フェスティバルが開かれました。内容は、山武地区の地場産業の盛り上げ、山武地区に住む人々の国際化・国際交流を主としたものです。18日～20日と、JVC 東金農場が主催した、エチオピア支援のためのバオバブバザールを行ったのをかわきりに、期間中の19日には、グループ・ザ・田舎るちあというグループが主催した加藤登紀子コンサートが開かれ、収益金の一部を東金農場に寄付して頂きました。また、26日には、地域からの海外協力、国際交流を目指すぶどうだなの下のシンポジウムを、JVCと東金ユネスコの共催で開き、これにはJVCの岩崎代表もパネラーとして参加しました。また、シンポジウムに参加したアジアの国々の人たちが当日、東金市内でホームステイをして、交流を深めました。

翌日の27日は、フェスティバルのフィナーレを飾る鴉ヶ嶺フィールドコンサートが行われました。これは、地元で活動が続けている山武ボランティア協会が中心となり、笠木透、長谷川きよし等のフォークシンガーを迎えて市内の公園での催しとなりました。また、山武の地酒を見直そうと、4つの酒造会社の協力で、地酒の無料配布もあったので、歌あり、バザーあり、お酒ありといった感じで、なごやかにフィナーレを飾りました。この他にも、東金生活クラブ生協や市内の居酒屋さんや喫茶店、スーパーの協力もあり、イベントの集合体といったフェスティバルでした。

今回、いつも一緒に活動しているお百姓さんにとっては、この時期、稲刈りと重なって大忙しでしたが、終わってみれば何のその、まだまだやりたらない人もいよう、東金はどうやらただの田舎町ではなさそうな気がします。(井本勝幸)



タイ国障害児の絵画展



JVC 神奈川の役割の1つに、神奈川県内の草の根グループや活動的の市民との交流・情報交換・共同企画などがある。JVC 神奈川が間借りしているのが、(財)神奈川県国際交流協会内の国際交流コーナー「KIS」。T/E72号で簡単に紹介したように、この「KIS」には、様々な人が情報を求め、仲間を求めて集まってくる。成田正雄さんもそうした1人だ。ご自身交通事故による車椅子での生活をおくりながら、エネルギーに活動している人である。その成田さんが中心になって準備を進めているのが「タイ国障害児の絵画展」である。障害児問題は、どの国においても日陰者扱いされ、あまり表にはでてこない。その上、第3世界での障害者であることは、ただでさえ貧しい人々が多い国の中にあって、二重の意味でハンディがある。今回タイの障害児のことをとりあげることは、そのような底辺の人々への関心を日本の人々に持ってもらうきっかけになるのではないだろうか。

もともとこの絵画展は、JVCの初期のメンバーで

現在大阪に在住している井上博夫さんが大阪で開催したもの。大阪でたいへん評判だったため、ぜひ他の地域での開催もと関東での協力者を求めている。そんな井上さんに共鳴したのが成田さん。早速、友人や知人に呼びかけて、「タイ国障害児の絵画展」神奈川実行委員会を組織した。JVC 神奈川も成田さんの呼び掛けに応じて、実行委員会のメンバーとして協力している。

この絵画展の県内での開催は以下のとおり、

- a 昭和 62 年 12 月 8 日(火)～12 月 21 日(月)
県民共済ギャラリー(横浜市中区)
- b 昭和 63 年 1 月 9 日(土)～1 月 24 日(日)
厚木市勤労福祉会館(厚木シティプラザ 5F)
(a, bとも入場無料)

なお、この絵画展に出展された作品(65点)のうち、6枚が絵はがきになって現在販売中(1組400円)。実に色彩感覚ゆたかな絵で、見る者の心をはっとさせてくれる。この収益金は、絵をかいいたタイの障害を持つ子どもたちに送られる。(山口誠史)

「食卓から見えるアジア」

東京山手YMCA 国際理解講座

日頃、私たちが口にしている食品の中には、アジアとの関わりにおいて多くの問題を抱えながら存在しているものが多くあります。

本年の国際理解講座は、それら食品のいくつかにスポットをあて、その輸入・輸出の背景やそれにまつわる問題を学ぶことにより、私たちと他のアジア諸国との関わりを考えてみたいと思います。

①11月14日(土) 4:00～6:00 PM
「お砂糖とアジア」

ネグロス島の子供たちを救え

堀田正彦(日本ネグロス・キャンベーン委員会事務局長)

②11月14日(土) 6:00～8:00 PM
「日本製化学調味料のアジア侵食」

里見 宏(国立公衆衛生院)

③11月20日(金) 7:00～9:00 PM
「天ぷらが口に入るまで」

～エビ大量輸入の背景～

村井吉敬(上智大学アジア文化研究所)

④11月28日(土) 4:00～6:00 PM
「粉ミルクに脅かされるアジアの子供たち」

中谷文美(乳児用粉ミルク問題を考える会)

⑤11月28日(土) 6:00～8:00 PM
「総論 日本とアジアの食糧事情」

高見敏弘(アジア学院理事長)

・合宿

11月28日(土) 8:30 PM～29日

12:00 PM: 含夕食

(8:30 PM 山手 YMCA より移動)

※講座に参加して、今後、講座で知った問題をどうとらえ、取り組むべきか意見交換する。

場所 講座 山手 YMCA

新宿区西早稲田2-18-12

tel 03 (202) 0321

合宿 早稲田奉仕園

新宿区西早稲田2-3-1

参加費 講座 各回 800円

(全回一括 3,500円)

合宿 (含夕食 3,500円)

11月15日(日) 2:00 PM 開場 2:30 PM 開演

ブルキナファソ・チャリティコンサート

・武蔵野公開堂 (吉祥寺駅から徒歩2分)

・当日券 2,300円, 前売券 2,000円

・チケットの問合せ 03 (383) 6322, 0478 (73) 5682

・出演者 スジュマ オマタ(日本シタール協会会長)

鈴木英夫, 鈴木真澄, 加藤直次郎, 他

※このチャリティコンサートの収益はアナンダ・マルガ国際救援隊を通じて、ブルキナ・ファソの総合開発プロジェクトに使われます。

オールドナティブ・セミナー第4期

「第三世界を感じる」

①10月22日(木) 6:30～8:30 PM

[じゃばゆきさん]

お話 アジアの女たちの会

なぜじゃばゆきなのか?! アジアの中の日本とは、どういう存在なのか?!

②11月19日(木) 6:30～8:30 PM

[熱帯雨林が消えていく]

お話 地球の友(予定)

今、地球から森が急速に失われつつあります。とりわけ、熱帯雨林の破壊は深刻で、第三世界の人々の生活や環境を脅かしています。

③12月17日(木) 6:30～8:30 PM

[解放の神学が問いかけるもの]

お話 山田経三氏

ラテンアメリカやフィリピンにおける貧富の差の増大。構造化された暴力という状況の中で、貧しい者、抑圧される者の側に立ち、現在のあり方を変えていこうと実践している“解放の神学”

④1月21日(木) 6:30～8:30 PM

[バナナと日本人]

お話 鶴見良行氏

いつも食べているバナナ! ひと皮むけば、フィリピンの労働者の暮らしぶり、他国籍企業の進出がもたらす意味が見えてくる……複雑な、味わい深いものなのです。

⑤2月18日(木) 6:30～8:30 PM

[今太平洋は、そして私たちは]

お話 荒川俊児氏

太平洋を核戦略の海として、我が物顔で使ってきた「先進国」に対して、太平洋の人々は、今、はっきり『NO』と断っているのです。太平洋の島々で暮らす人々の動きを通して、私たちの『今』を考えていきます。

場所 西地区センター 045 (314) 7733

横浜市西区岡野1-6-41

会費 1期 2,000円(1回 500円)

問い合わせ 03 (963) 2421 [昼]

044 (733) 1346 [夜] 宇賀神

「国際熱帯林セミナー」

その保全・持続的利用・回復を目指して

現在行われている伐採や破壊が続けば、今後数十年のうちに消滅するか著しく劣化すると考えられています。これによって数億の人々がその生活を大きく脅かされますが、熱帯雨林を保有する国の多くは現在の国民生活の維持や対外債務の支払いのために自然の回復力を大きく上回るスピードで伐採を続けています。(中略)

このセミナーの直後に横浜で開かれる国際熱帯木材機関(ITTO)の理事会でも、いかにしたら持続的な形で熱帯材の生産が進められるか、議論される予定です。

私たちが直面する最も重要な環境問題の1つである熱帯雨林の破壊を止めるために、私たちがなすべき具体的な方法を探っていききたいと思います。

日時 11月14日(土)

10:00 AM～8:00 PM

場所 横浜神奈川県民ホール6階

横浜市中区山下町3-1

tel 045 (662) 5901

参加費 1,000円

主催 熱帯林行動ネットワーク

後援 WWF インターナショナル

問い合わせ 03 (770) 6308

03 (496) 8650

JVCプロジェクト

1987年9月25日 現在

活動地名	活動内容	出資団体	担当者
東京本部	渉外、事業計画、資金調達、ボランティア調整、会計、総務、情報収集および広報等。 機関誌『トライアル・アンド・エラー』発行。 JVC 説明会—毎月第1月曜日 午後6時～9時 第3土曜日 午後1時～4時 学習会 月1回 午後6時～9時 (希望者にはハガキにて連絡)	全国社会福祉協議会	岩崎駿介(代表) 星野昌子(事務局長) 佐々木志保、林 達雄、前川昌代、鶴田三芳、古西 勇、富安光子、岩崎美佐子、アイネス・バスカビル
神奈川県 (JVC 神奈川)	神奈川県内における渉外、事業計画、情報収集、資金調達等を行う。 神奈川県及び県内の市民団体との共同事業の企画、運営。定住難民プロジェクトのコーディネーション JVC 説明会—毎月第1火曜日 午後6時～9時 毎月第2土曜日 午後1時～4時		山口誠史
日本国内	●定住難民プロジェクト 9月5日(土)、定住難民プロジェクトの訪問員・ボランティアの人たち20人以上で、大和定住促進センターの見学会を行った。内藤所長のお話のあと、日本語教室の授業の様子を見学した。また訪問相手が決まっていなかったためにまだ活動に入っていないボランティアの人もあるので内藤所長に協力を求めたが、センターを退所した定住者の住所リストの提供は断られた。 9月17日、佐藤弁護士を中心に学習会を開催した。テーマは「労働」。今後は毎月第3木曜日に東京と神奈川で交互に学習会を開く。 ●東金農場 稲刈りの大半が終了した。 山辺の郷フェスティバルが東金市のボランティア団体の手によって行われ、JVC にもその収益の1部が寄付された。 バオバブバザール(9月18～20日)、加藤登紀子コンサート(19日)、ぶどうだなの下のシンポジウム(26日)、山辺の鳥グルメパーティー(26日)、鶴ヶ嶺フィールドコンサート(27日)。	ジャパン・タイムス 神奈川県福祉部 横浜キワニスクラブ、 全国老人クラブ連合会 国際交流ホスピタリティ・トラスト	山口誠史 他約60人
エチオピア (ウォロ州)	●総合的復興促進 - 種子銀行 耕作用の牛を持たない農民に分割払いによる役牛の販売を行っている。 - 植林 土壌保全用及び家庭植林用に40万本の苗木を植えた。雨不足のため根付くか否かが懸念される。 - 農業教室 村人に対して、土壌保全・植林、有機農業を指導する農業教室を開始。小学校での環境教育を継続。 - 保健・栄養 母子教室、家庭菜園の奨励を訪問形式で行っている。農業省による短期婦人家庭教室の一部を担当した。地元診療所とともに母子健康相談も実施。 - 井戸、給水 水場の汚染を防ぐための「泉の保護」を実施。 - チェック・ダム(砂防ダム)建設 V字谷浸食防止のための石積み作りをしている。 - コレプ地区緊急食糧援助 1万人を対象に Food for work にて実施中。	CRDA、 西本願寺、 チャリティ・カレンダー、 チャリティ・サイクル、 メリノール修道士会、 全国老人クラブ連合会、 バンド・エイド、 日本漫画家協会、 東京グリーン・ウォーク ジャパン・タイムス	加納 妙、伊藤達男、 伊藤幸子、有本敦子、 山田 盛、 イエットベルク、ソロモン、 バレット、フェテルワルク、 ダニエル

活 動 地 名	活 動 内 容	出 資 団 体	担 当 者
ソマリア マガネイ・キャンプ (ゲドー郡) ハルバ・キャンプ (ゲドー郡)	●農業による自立促進 JVCがこのプロジェクトを始めて以来0.5haを1家族に割り当ててきた。しかし、自立していくためには0.5haは少なく、各家族1haにする必要がある。現在その再編に着手し始めた。また、ハルバの新農場(20ha)の周辺に7家族が移り始めた。 ●現金収入プロジェクト(インカム・ジェネレーティング) かじ屋は、ナイフ、くわ、おのなどを毎日作っている。一日約1500円の収入があり、上々のすべり出した。またバン屋もマガネイ・キャンプで店開きした。さらにドンキー・カートによる水屋も始めた。 ●コミュニティー・サービス 焼き物コース(七輪、香炉、灰皿)と帽子製作コースのトレーニングは順調に続いている。	UNHCR, 創価学会文化・ 平和運動事務局 仏国土をつくる う会	嶋 紀晶, シアッド, 荻ノ迫善六, 船川秀夫, 中岡哲也, モハメッド, ラシッド, ハジ, アオキ, アブディ ・ジョフ, フセイン, ア ハメッド, ハッサン
ジャボレ・キャンプ (ヒラン郡)	●植林 乾季に入り、水の供給が不足し、一部の木々の成長が止まっている。また SRCS (サウジアラビア赤三日月社)に移行したヘルスセンター内の植林管理がずさんになり始めたので、SRCSに十分なプロジェクト管理をするよう申し入れた。 ●現金収入(インカム・ジェネレーティング) 前月と大きな変化はない。水屋もバン屋も借金をJVCに返却している。 ●家庭菜園 10月、11月の雨季を待って種をまく予定。	朝日新聞厚生文 化事業団, 砂漠に種をまく 人の会 R.I. ジャパン	浜野敏子, 米澤 聡, 庄司 美, シュクリ, ハッサン, アブディ, シュイク・アブディ
カンブチア (ブノンベン カンダール県 プレイベン県 スバイリエン県)	●カンブチアの人々への総合的人道援助 8月前半までの降雨量が非常に少なかったため、各地で井戸の水枯れ、湖・池の低水位、河川の孤立(とぎれ)などの報告が相次いでいる。コンボンスプー県の農民の記憶では20~30年に1度の大干ばつであるという。 1. サンタピエツプ(平和)技術学校、ワーク・ショップ 校舎・修理工場は完成し、8月15日と17日にスタッフの選考が行われた。メカニック、同アシスタント55人を含む81人のスタッフが選考された。 2. 井戸掘り/給水(OXFAMと共同) プレイベン県、スバイリエン県で続行中。 3. プレック・ビノウ孤児院援助 8月13日、男子寮の補修完成。雨漏りもなくなり非常に明るくなった。雨といも水タンクも完成し、あとはトンレサップ川からの給水と浄水システムを残すのみとなった。 4. 補助栄養給食 カンダール県ブノンベン郡またはブノンベン市ボントック地区の RINE センターの担当が内定した。保健省、ブノンベン市、保健局、ユニセフ、EDC(フランスの NGO)との共同活動となる。	全国老人クラブ 連合会, 創価学会文化平 和運動事務局, モラロジー MIRC, 立正佼成会, 自動車労連, 庭野平和財団, ILC チャリティ グループ, 西本願寺, 善興寺ダーナ基 金, 高岡青年僧侶会	熊岡路矢, 簗田健一, 簗田玲子, 馬 清, マリー・キャマル
人材派遣プロジェクト			
フィリピン (PFAC, パラワン島)	●国際移民委員会(ICM)ー第三国定住手続きにともなう医療業務及びキャンプ内でのプライマリ・ヘルスケア。	城西病院	石井弘代

活 動 地 名	活 動 内 容	出 資 団 体	担 当 者
タイ バンコク事務所	渉外、事業計画、資金調達、ボランティア調整、会計、総務、情報収集および広報、バザー、古本のセール。季刊『ニュース・レター』（英語・タイ語）発行。	全国社会福祉協議会	ボンビモン・チャイブーン、 柴田久史、 カモン・ミンムアン、 スンニー・ティチャリヤクン
カオイダン (カンブチア 難民キャンプ)	●西崎憲司記念技術学校 ソーシャルワークの訓練を受けた経験のあるクメール人を2人雇い、オフィスのワーカーと協力させ、身体障害を持つ生徒のためのスペシャルチームを設置した。 毎日のモニタリングが密になった。キャンプ内での仕事は主にタイ人スタッフがきりもりし、日本人スタッフは来年度に向け、資金集めに動いている。	UNHCR R.I. ジャパン	矢野和貴、谷山博史、 ソムヨット・ラタナタム、 バイトゥーン・チマチュイ
国境のサイト2、 ノンチャン (カンブチア 難民村)	●補助給食・栄養保健教育 8月22日から1週間にわたり、妊産婦のスクリーニング、3歳以下の子供たちのカード登録が行われた。その際にドライバックを受け取る時に使う3歳以下の子供たちの成長記録カードに自己記入をしたところ、生年月日の誤り、他人への売却など様々な問題が発見された。そこでMCH（母子保健センター）アドミニストレーション、UNBROと協同してカードの再検討が行われている。 9月15～16日には来年度の補助給食の内容についてのミーティングがUNBRO、各ボラグ間でもたれた。	WFP/UNBRO	テリース、ブーム、 チャンチャイ、トンバイ、 スピチャ、北代るり、 ソムサック、カレン、 エッ、前野博美 アドレアン
パナニコム (第三国定住待ち 難民一次収容施設)	●文化オリエンテーション ・日本定住予定者 ①日本語学習の基礎（読み、書き、聞き取り） ②日本語の日常会話の習得 ③日本に関する概略的な理解を促す ④渡航に必要な事柄への理解と実習 ・日本以外の国への定住予定者に手続きの理解を深めてもらう。	天理教千葉	石原淑子、落合正幸、 フォード・順子、 赤坂泰央、鶴岡善和 アナ・ブダミリンブラ ティープ、 ウィバ・ロンブリック
地域開発 (バンコク市内の スラム地区)	●奨学金援助 子供新聞第1号を発行。7月に渡した奨学金がきちんと使われているか巡回指導をしている。 ●クロントイ図書館 新しい図書館が完成。引越しも終わった。 ●移動図書 スタッフが交代することあって活動地を縮少し、より密な関係を地域と持つために、活動内容の再検討をしている。 ●移動学習センター（プラティープ財団、FFSC、JSRCとの共同プロジェクト） 9のスラムで学習の機会のない子供たちのため人形劇などで教育、また母親グループの育成を行っている。 ●農村 チャャブーン、コラートなどで活動地選定の調査中である。 ●その他 9月は半期の活動評価を行うために各々の活動を休止して、各スラムを訪問。調査・現状把握・評価を手分けして行った。また新しい図書館は、正式な開所式を10月中旬に行う。その前のデモンストレーションとして、Lock 1, 2, 3を中心に巡回。本展示会や定期的な映画会を開催している。	モラロジーMIRC、 JOFIC、 庭野平和財団、 京都国際青年委員会	ヴァラナート・チェンクン、 サムルアイ・ジョンヨー クラン、アルニー・スニ ットムンヴァイ、リーラ ・クンナロン、スワン・ リンサムパン、コメン・ スンサマラヤ、 柴田久寿子

JVCの活動とその目的に御理解を

▶JVCとは—Japan International Volunteer Center
は1980年2月、タイのバンコクで設立された民間救援団体
です。1979年暮れの、インドシナ難民の大量流出をきっか
けに、日本から駆けつけた若者と、現地タイですでに活動
を始めていた日本人とが一体となり、現在の組織の原形が
できました。JVCは、活動者の自発的な意志に基づき、日
本の個人・団体からの寄付金、国連機関からの委託金等
によって運営されています。JVCは、人種、国籍、習慣、
宗教その他の信条の違いを越えて、難民および同様の窮境
にある人々を対象にできる限り継続的な活動を行います。

▶JVCの会員募集について—会員は、総会に出席し、
JVCの方針などを決定する他、情報・資料の入手、各種の
活動・報告会・上映会・学習会等へ参加することができ
ます。また正会員には自動的に、機関誌(T/E)をお送りい
たします。会員の種別と年会費は以下の通りです。

- ・正会員 (一般会員 10,000円 活動者会員 3,000円
団体会員 30,000円 学生会員 3,000円)
- ・賛助会員 金品による支援 (金額は自由です。)

▶機関誌『Trial & Error』のみの購読について

- ・毎号1冊送付 年間購読料 3,000円
- ・毎号4冊送付 年間購読料 10,000円

▶送金の方法—下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。

- ①会員：東京5-48365 加入者名—JVC会員係
- ②T/E：東京3-54186 加入者名—JVC東京事務所
(住所、氏名、購読開始月をお書き添え下さい。)

▶みなさまの募金を支えるJVCの活動—救援活動をより充
実させるため、以下の募金をお願いしています。なお募金の
20%をJVCの運営経費に充当させていただいています。

- A. アフリカ難民救援募金 (9月小計 9,004円) アフリ
カの難民・飢餓民への救援プロジェクトに使われます。
 - B. グリーン・フォー・アフリカ募金 (9月小計 246,000円)
アフリカの土壌回復、農業、植林等に使われます。
 - C. インドシナ難民救援募金 (9月小計 7,000円) タイ国
内にある各難民キャンプのプロジェクト費にあてられます。
 - D. カンプチア募金 (9月小計 38,615円) カンプ
チア国内の復興のために使われます。
 - E. タイ・スラム募金 (9月小計 405,000円) バンコ
ク市内のスラムにおける生活向上のためのプロジェクト及
び図書活動に使われます。
 - F. デッグ・スラム奨学金・基金 (9月小計 184,250円) バンコ
ク市内のスラムの子供達が学校へ通う費用を援助します。
 - G. タイ農村募金 (9月小計 2,000円) タイの
農村開発のために使われます。
 - H. 定住難民募金 (9月小計 5,000円) 定住難
民のための日本語教材費と家庭教師の交通費に使われます。
 - I. JVC運営経費募金 (9月小計 10,000円) 現場を
支えるのに不可欠な事務運営経費、人件費に使われます。
 - J. 無指定募金 (9月小計 139,180円)
- ▶送金の方法—下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。
東京9-27495 (募金種目名をご記入下さい。)
加入者名—JVC東京事務所

編集後記

▶現地にいるスタッフが1番求めているもの、それは日本
食でもなければ、フカフカのベッドでもない。自分たちの
活動が本当に意味のあるものなのかどうか、国内からの声
援や励まし、あるいは問いかけなのだ。特別にプログラ
ムの行きづまりや変更がなければ、現地の有能なスタッフに
すべて任せがちになる。しかしそれでは現地にいる者は置
きざりにされたような感じになってしまう。

どの現場の人も手紙が来るのが1番うれしいという。も
し暇と関心のある方は右の住所に手紙を書いてみて下さい。
(自戒もこめて)。



昭和62年10月20日発行 (毎月20日発行)

編集人 前川 昌代

発行人 星野 昌子

発行所 日本国際ボランティアセンター(JVC)東京事務所
〒113 東京都文京区湯島3-1-4 会田ビル5階
☎03(834)2388 FAX: 03(835)0519
Telex: 7604025 JVCHQ UC

神奈川事務所 〒231 横浜市中区山下町2 産業貿易セ
ンタービル9F (叻神奈川国際交流協
会内 ☎045(671)7082

バンコク事務所 JVC THAILAND
29/3 Soi Saengchan, Sukhumvit40,
Rama 4 Road, Bangkok 10110.
☎391-1117
Telex: 87032 COMSERV TH

ソマリア事務所 JVC SOMALIA
c/o UNHCR P.O. Box 2925
Mogadishu,
Telex: 794 HICOMREF SM

エチオピア JVC ETHIOPIA
事務所 P.O. Box 6941 Addis Ababa

カンブチア JVC KAMPUCHEA
事務所 203 Monorom Hotel Phnom Penh
Letter: c/o ICRC, P.O. Box 11-1492
Bangkok.

印刷所 (株)ベスト・プリンティング

*本誌の記事・写真等の無断転載・複写を禁じます。

定価 送料共300円